

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20300233

研究課題名（和文） ジェンダー・センシティブな子育て家族支援グループ

研究課題名（英文） Gender-sensitive child rearing family support group

研究代表者

田村 毅（TAMURA TAKESHI）

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：10242231

研究成果の概要（和文）：

子育て家族の追跡調査から、子育て家族システムの特徴、特に里帰り出産、祖父母の役割について明らかにした。また、海外在住の子育ての課題について明らかにした。児童虐待が発生する家族システムの特徴とそれを支援する福祉システムの困難さと課題について明らかにした。ジェンダーの視点から男性が子どもを虐待するメカニズムを解明し、虐待関係にある家族への支援の方策として父親グループ活動のプログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：

Follow up questionnaire survey was analyzed from the family systemic perspective, with family of origin child birth and the role of grandparents. The difficulty of a child care in overseas setting was analyzed. The mechanism of child abuse in the family system was well researched through the case examples. The difficulty and future task of child welfare system were analyzed. Men's support group for abusing fathers were conducted to analyze the family systemic mechanism from gender perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2009 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：家政学（児童学）

科研費の分科・細目：家政学（児童学）

キーワード：家族心理学、保育、ジェンダー、児童虐待、支援グループ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する研究動向

近縁の子育てに関する社会的・家族的環境

は a) 家族形態の家族形態の変化（拡大家族から核家族へ、少子高齢化）、b) 地域ネットワークの弱体化、c) 性役割（ジェンダー）規範

の変化（女性の社会的役割の獲得、子育て役割の男女共有化）など大きく変化している。これらを踏まえ、①福祉的視点からの保育面・経済面での支援に関する研究、および②子育てを主に担う女性（母親）への心理支援の研究は進んできたが、③男性への心理支援・研究、④家族システム全体に対する心理的支援・研究は十分でない。

(2) これまでの研究成果

①子育て家族の特徴についてのアンケート調査から、妊娠・出産・子育てというライフサイクル上の変化の中で、夫婦の親密性が低下していることが明らかになった（業績6, 41, 43, 61, 63 など）。これは、ベルスキーらのアメリカにおける研究と合致している。

②子育て支援教育(Nobody's Perfect)を実施し、その効果が検証された一方で、より深刻な問題を抱えた家族、および父親の参加という観点で、実施方法とプログラムの改善が必要であることが明らかになった。

③ジェンダーに配慮した男性支援について明らかにした。

④家庭内暴力、児童虐待などの家族問題を抱えた男性の支援活動を行い、その効果と困難さが明らかになった。

(3) 着想に至った経緯

より効果的な子育て家族支援を行うために、従来の母親中心・個人中心の視点を越え、ジェンダーの家族システム論的な視点から、①男性も含めた家族支援、②夫婦合同面接、グループ面接を含めたシステムの支援の可能性について着想するに至った。

2. 研究の目的

過去7年間の継続した子育て家族の研究成果を発展させ、母親（女性）のみならず、男性（父親）を含め、虐待などの家族問題を解決できる家族システムの特徴を明らかにし、それを育成する家族支援グループ活動を開発する。

(1) 子育て家族システムの実態

①子育ての困難さ、親子関係、母子関係・父子関係、夫婦関係の問題点、

② ライフサイクル上、子どもが成長する中で、家族システムの特徴の変化

(2) 子育て家族に起こりうる臨床的問題

特に、児童虐待家族について、虐待に至るメカニズム、虐待する親の心理的要因について

(3) 虐待関係にある家族への支援

特に、児童虐待家族について、虐待に至るメカニズム、虐待する親の心理的要因、親子の虐待的關係を回避する家族システム、支援される男性の特徴と難しさ、支援の工夫、得られる効果など

3. 研究の方法及び4. 研究成果

上記の観点別に、以下の9つの研究を行った。

（主に「(1) 子育て家族システムの実態」の観点から）

<研究1> 出産前後の里帰り

方法) 出産前後の里帰りが父子関係・父性・夫婦関係に与える影響と父親への支援方法を明らかにするために、妊娠期から子どもが2歳になるまで、父子関係、父性、夫婦関係について、父親196名を対象に縦断的に質問紙調査を実施した。

結果) 里帰り群のほうが「子どもが邪魔である」「子どもがわずらわしい」など、子どもに対する負の感情もっていた。夫婦関係についても「妻との関係に満足している」「妻との関係は安定している」において、里帰り群のほうが有意に低く、夫婦関係が不安定であることがわかった。支援方法として、父親の子ども理解を促し、子育てが楽しいと感じられ、また、夫婦関係を調整できるような場が必要であることが示唆された。

<研究2> 親からの被養育体験が育児に及ぼす影響について

方法) 質問紙調査でパーカーのPBI尺度を用いて、親が自分の親からどのように育てられたかという被養育体験の認識が、現在の子育

てに影響しているのか否か分析した。

結果) 母親は自分の母親から愛情深く育てられたと感じている。被養育体験と「子どもへの愛着」「子どもへの承認的なかかわり」「子どもへの統制的なかかわり」について相関をみたところ、母親はほとんどの項目で関連はみられなかったが、父親は care 得点と子どもへの愛着に、care 得点と承認的なかかわりにそれぞれ相関がみられた。

本調査の結果、父親は自分の母親からの被養育体験が子どもへの愛着やかかわり方に影響していることが明らかになった。特に子どもが2歳以降の「承認的なかかわり」については、父親ではなく、母親からの養育体験が親モデルとして影響していることが明らかになった。母親においては、今回の分析結果では、被養育体験が子育てに影響しているという傾向は見られなかった。親モデルとして、自分の母親よりも友人などの他の要因が強く影響している。

<研究3>海外在住の子育て

方法) 海外在住の日本人子育てサークル(イギリスなかよし会、ベルギー外遊びの会、オランダなかよしクラブ)を訪問し、インタビュー調査を実施した。

結果) 海外において、在住する国の文化と日本の文化のずれを、子どもが成長すると共に強く感じるようになること。駐在型と、定住型では、サークルへの参加意識が異なることがわかった。

<研究4> 中年期女性の次々世代育児支援に関する意識

方法) 祖母世代が次々世代の育児支援についてどのような意識をもっているのかを知り、祖母世代の祖母性を活かした支援策について検討するために、40代~50代の女性9名に構造化面接調査を実施した。面接の内容は、自分の定位家族との関係や、祖母との関係、将来、自分の孫や孫世代の育児に関わる可能性やそのメリットとして考えられること、子育ての経験は生涯発達上のキャリアといえ

るかなどである。

結果) 自分の祖母との関係については、「良い関係であった」者、「祖母との関係は薄かった」者とさまざまであるが、関係が良かったと答えているものが孫育てを積極的に考えているわけではなかった。孫育児にまつわる、嫁、姑間の問題も懸念された。

(主に「(2)子育て家族に起こりうる臨床的問題」の観点から)

<研究5> 性別と続柄からみた児童虐待者の特徴

方法) 「全国児童相談所における虐待の実態調査(平成20年)」を分析し、女性虐待者と男性虐待者が行う虐待の相違の一端を、数的データによって検討した。

結果) 「実母のみの家族」の割合が高率であった。男性虐待者の約3割以上にDVが認められた。血縁のない男性に於いて性的虐待の発生率が最も高かった。血縁のない父親の虐待は重度化する方向にある。

(主に「(3)虐待関係にある家族への支援」の観点から)

<研究6> 虐待親向けのプログラム1(関西版)

方法) 家族再統合実践を展開し「男親塾」と名づけた虐待親向けのプログラムを展開した。月2回のグループワーク(24回)と月2回の個人カウンセリングもしくは夫婦カウンセリング(7家族に対して述べ21回)、そして参加している家族を対象にしたファミリーグループ・カンファレンス(5家族を継続)を適宜開催した。

さらに、児童相談所の児童福祉司、心理士を対象にした援助者援助の研修をおこなった。再統合を果たした5組の家族についてその後の見守り的な支援も開始することができた。

結果) 直接的な家族再統合支援、児童相談所で関与する多職種連携事例検討会、家族をシステムとして把握するためのケースワーク研修会と多層的な家族支援ができたことや

男性と父親の視点を入れたジェンダーアプローチも加味させることで家族システム全体の変容を意図した家族支援の広がりの中から家族再統合のための実践的理論の構築に取り組んだ。

<研究7> 虐待親向けのプログラム2 (関東版)

方法) 東京都児童相談センターでの子どもに虐待をした父親のグループで工夫されてきたワークの内容のシステムとしての有効性に関して明らかにした。また、東京、大阪、茨城で行われている子どもに虐待をした父親のグループのスタッフにヒアリングを行い、グループの特徴を比較した。

結果) 父親と担当児福司との関係が「対立から協働へ」変化する要因として、

1. ジェンダーセンシティブな男性グループというメンバー構成
2. グループが内部スタッフ (グループの受付窓口になる児福司か児童心理司1名と外部スタッフ2名 (精神科医, 臨床心理士各1名) で構成されている構造
3. 開始と終了が個々により異なるオープングループならでは発生するグループの力
4. システムズアプローチや解決志向アプローチをベースにして行われているグループワークなどが相互関係的に影響していると考えられる

などが認められた。

いずれのグループも暴力を肯定したり、虐待を否認している父親たちに暴力を用いず、虐待であったことを認める普通の父親としての責任 (相手と応答する能力) を醸成していくことが大切である。またそのプロセスで加害者の中にある被害者意識がある程度言語化でき、それを受け止めていく居場所としてのグループの存在価値を重んじている。

<研究8> 児童相談所と男性虐待者の間に生じる対立構造

方法) 「全国児童相談所における虐待の実態調査」から得られたデータと、男性虐待者へ

のグループ療法実践の経験を援用し、彼らの児相に対する攻撃の心的防衛機制のありようを仮説モデルによって示した。

結果) 男性虐待者の「迫害的父親像」は抑圧され、反動形成によって「good object (良い対象)」として語られる。だが、児相の糾弾/訴追によって、その像は次第に本来の「bad object (悪い対象)」として覚醒してくる。けれども、虐待者はそれを意識化することなく児相に投影する。これが、特異な男性性を身にまとう、男性虐待者の心的防衛機制である。

<研究9> 児童福祉司による男性虐待者への対応

方法) 児童福祉司を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、そこで得られた質的データから児童福祉司は男性虐待者にどのように対応しているのか動的モデル (仮説) を探索的に生成した。

結果) 生成された概念: バリエーションの意味内容を解釈して集約し、最終的に7つのカテゴリーが生成された。カテゴリー名は「男性虐待者一般の特徴」「情報量の不足」「初期対応の難しさ」「児童福祉司への怒りと攻撃」「複数対応の必要性」「対立状況での対応」「組織としての限界」とした。カテゴリーの生成過程から「対立状況での対応」をコアカテゴリーと同定した。生成されたカテゴリー間の関係を動的に捉えて作成した動的モデルのプロセスを、カテゴリーや概念の関係によって説明しながら、児童福祉司の男性虐待者への対応について考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計21件)

1. 中村正: 社会臨床の視界 (7) 一男親と父親の「あいだ」にある父性の涵養、『対人援助学マガジン (デジタル)』、対人援助学会、第2巻3号、pp. 14-26, 2012. 査読あり
2. 中村正: 社会臨床の視界 (8) 一家族をシステムとしてエコロジカルにみること

- 一、『対人援助学マガジン (デジタル)』、対人援助学会、第2巻4号、pp.15-24, 2012. 査読あり
3. 久保恭子：出産前後の里帰りが父子関係、父性、夫婦関係に与える影響と支援方法。小児保健研究71巻3号, 2012. 査読あり
 4. 加藤吉和：性別と続柄からみた児童虐待者の一特徴 平成20～23年度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B) ジェンダー・センシティブな子育て家族支援グループ(報告) . 2012. 査読なし
 5. 加藤吉和：児童相談所と男性虐待者の間に生じる対立構造について 鎌倉女子大学学術研究所報第12号, 43-51, 2012. 査読なし
 6. 中村正：社会臨床の視界(5) 影をとらえるー感情について。『対人援助学マガジン (デジタル)』、対人援助学会、第2巻1号、pp.14-26, 2011. 査読あり
 7. 中村正：社会臨床の視界(6) 臨床の知の植民地化についてーどんな言葉と文脈で対人援助を考えるか、『対人援助学マガジン (デジタル)』、対人援助学会、第2巻2号 pp.14-25, 2011. 査読あり
 8. 中村正：「加害者治療」の観点からー暴力加害者への臨床論のために、『法と心理』、法と心理学会、第11巻1号、pp.14-20, 2011. 査読あり
 9. 中村正：親密な関係性における男性の暴力への対応ー加害者リハビリテーションの実践から、『月刊 地域保健』、第42巻10号、pp.42-46, 2011 査読あり
 10. 久保恭子：祖母力を活用した育児支援のあり方の検討。東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ62：257-261, 2011. 査読なし
 11. 田崎知恵子：中高年女性による子育て支援システムの構築にむけてー中高年女性による子育て支援に関する先行研究の分析。東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ62：269-278, 2011. 査読なし
 12. 中村正：親密な関係性における虐待・暴力と加害者臨床論ー虐待的パーソナリティ論の検討をとおして。立命館産業社会論集46：139-153, 2010. 査読あり
 13. 岸田泰子・田村毅・倉持清美：乳幼児をもつ母親グループを対象とした親支援活動の評価。東京学芸大学紀要総合科学系Ⅱ61：45-50, 2010. 査読なし
 14. 久保恭子：家族を支える看護の工夫ー子育て期の家族を対象にした子育て支援(合同夫婦グループ)の試みー。小児看護32(9)1198-1202, 2009. 査読あり
 15. 岸田泰子、井上幸代、田村毅：太子町における親支援プログラム Nobody's Perfect の展開。甲南女子大学研究紀要看護リハビリテーション学編、第2号、pp119-128 甲南女子大学, 2009. 査読なし
 16. 中村正：家族不安社会における親の欲望：親の問題として考える家族病理 家族療法研究26(3)：216-221, 2009. 査読あり
 17. 中村正：社会の変化と臨床のかたちー家族の臨床社会学。家族療法研究26(3)：228-232, 2009. 査読あり
 18. 倉持清美：多文化子育てサークルの子育て支援について：イギリス「なかよし会」の例から 東京学芸大学紀要。総合教育科学系59, 427-434, 2008. 査読なし
 19. 倉持清美、田村毅：多文化子育てサークルの子育て支援について。東京学芸大学紀要総合教育科学系59：427-434, 2008. 査読なし
 20. 久保恭子、田村毅、榎本さやか、及川裕子、岸田泰子：子育て支援として実施している合同夫婦グループの試み：新しい子育て支援方法の検討。東京学芸大学紀要総合教育科学系59：435-442, 2008. 査読なし
 21. 田村毅：マルチ・カルチャリズムと家族療法。家族療法研究25：227-232, 2008. 査読あり
- [学会発表] (計8件)
1. 久保恭子：Child birth transition of

marital relationship. 第10回国際家族看護学会(京都), 2011.

2. 倉持清美: 結婚生活の継続の中で配偶者との関係性はいかに育まれるか(2) - 妊娠・出産および親役割の獲得との関連から. 日本心理学会第74回大会(大阪), 2010.
3. 中村正: 司法臨床の可能性 - 加害者治療の観点から - . 法と心理学会第11回大会. 立命館大学(京都府), 2010.
4. 岸田泰子, 久保恭子, 田村毅, 及川裕子: 妊娠期から育児期における夫婦の生活満足感に影響する要因. 第51回日本母性衛生学会, 2010.
5. 久保恭子: 子育て期の夫婦の特徴と合同夫婦グループが夫婦に与える影響. 第25回家族研究・家族療法学会(広島), 2009.
6. 久保恭子: 里帰り分娩が父親の子育て・夫婦関係に与える影響. 第56回小児保健学会(大阪), 2009.
7. 岸田泰子, 田村毅: 乳幼児をもつ母親グループを対象とした親支援活動の評価. 第56回日本小児保健学会, 2009.
8. 田村毅: 大会長講演「マルチカルチャリズムと家族療法」. 日本家族研究・家族療法学会第25回大会(東京), 2008.

[図書] (計2件)

1. 中村正監訳『虐待的パーソナリティ』ドナルド・ダットン著、明石書店, 2011.
2. 犬塚峰子, 田村毅, 広岡智子: 児童虐待 - 父・母・子へのケアマニュアル - 東京方式 弘文堂, 2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村毅 (TAMURA TAKESHI)
東京学芸大学・教育学部・研究員
研究者番号: 10242231

(2) 研究分担者

市村彰英 (ICHIMURA HIDEAKI)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号: 70363786

加藤吉和 (KATOU YOSHIKAZU)
鎌倉女子大学・児童学部・教授
研究者番号: 70441920

岸田泰子 (KISIDA YASUKO)
杏林大学・保健学部・教授
研究者番号: 60294237

久保恭子 (KUBO KYOKO)
埼玉医科大学・保健医療学部・講師
研究者番号: 10320798

中村正 (NAKAMURA TADASHI)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号: 90217860

田崎知恵子 (TAZAKI CHIEKO)
日本保健医療大学・保健医療学部・准教授
研究者番号: 00389892

倉持清美 (KURAMOCHI KIYOMI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号: 30313282

(3) 連携研究者

伊藤良子 (ITO RYOKO)
東京学芸大学・教育実践研究支援センター・教授
研究者番号: 00143628